WASON
HQ
1104
J74+

THE WOMAN'S MAGAZINE.

Dec.
188?
no. 8

女學雜誌

明治二十年十二月十七日刊行

毎土曜日發兌
一冊正價五錢
府内無郵送税

第八十九號

東京 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 89, December 17th, 1887.

第八十九號

EDITORIAL:—Sewing Lessons in Girls School.

LEADING ARTICLES:—A View on the Moral Education in the Grammar School (concluded) by Senator H. Kato; Secret of Well-dressing and Use of Cosmetic, by Rev. K. Kimura; Sanitary Matters in Homes, J. Tsuboi. M. D.

MISCELLANIES:—Thou Shalt Love Each Other; Japanese Drawing.

BIOGRAPHIES:—Flora Macdonald.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

●社説　女學校の裁縫科

●論説　德育に付ての一案（加藤弘之）○金屋の秘訣（木村熊二）○家内の衛生（坪井二郎）

●叢話　爾曹互に相愛すべし○和書講義（八木兼辰）

●佳傳　フロラマクドナルド小傳

●寄書　女學時論の感（錦田女史）○文苑

●新報　四十件

●珊瑚の珠（第四十六回）

○詩人ブローニン夫人云く吾等温和なるによりて大いなるべく謙くだるによりて高めらるべしとの教へあるが故に吾々心を定むることを得るなり

○バイロン侯チャイルドハロールドに之れあり云く昔し羅馬に一娘あり其父刑に處せられて牢獄に入り將に餓て死せんとす娘すなハち密かに之を訪ふて其乳を父に含ませ以て之を助けんとす法官この孝に感じて之を赦すに至ると

○アダムスの書中に批評家の言を記して云く凡そ男子には其好の女性を理想し女子には男性の宜しき所ろを理想するならん但だ此の理想ハ事情と習慣と教育との爲に由つて壓制さるゝと雖ども時あつては自由に發達して其の理想の儘に自から成長することあらん彼のマダームデスタルもしくはヂヂスサンドの如き女丈夫には即ハち如此き異數の發達ありしものあらん

○エイム、ウレン云く一國政治上及び道德上の地位を觀察せんと欲せバ先づ女子が何如なる待遇を其の社會に於て受るやを吟味すべし何如なる風俗法律ありと雖も女子の景况を見バ則ハち万事直ちに明白ならんと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第八十九號
明治二十年十二月十七日

●社説

○女學校の裁縫科

梁川星巖の妻紅蘭と云へるは近代に有名の夫人なりき才學凡庸の女の如くあらず能く夫の志を知つて共に四方に周遊したるが名地佳境に遇ふ毎に錦情勃然として動き乍ち珠玉を吐いて名吟を爲したると尠らず左れば凡ろ女流にして唐うたの道に達したらんものを數ふる時は指を先づ紅蘭に屈めざるものなし巾幗にして此の名譽を博したるは眞に喜こぶべきの至りにあらずや、然るに其吟詠の萃を抜いて一冊に編し題して紅蘭小集と云ふものあり吾人嘗て之を讀むに開卷第一葉先づ題して裁縫の餘事と記せり蓋し女工縫針の餘暇を以て之を詠じたることを辨ずるものなり。抑も紅蘭の如く吟詠の道に於て殆んど專門の如く熱心したるものも尙ほ其詩集を裁縫の餘暇に成れるものと爲し少さか遠慮して世に憚かる所ありたるは何故なる乎、蓋し當時婦女子の職掌は殆んど只だ此類の仕事にのみ限れることとし彼の書を讀み詩を吟ずるが如きは既でに女道の外に走れるものと認めたるが故なり、益軒翁の女大學に云く女は常に朝早く起き夜遲く寐ね晝はいねずして家の内の事に心を用ゐ織縫績緝怠たるべからずと此の如き覺悟を覺悟し此れ丈けの女藝を心得て以て女の事畢れりと思はゝ裁縫は眞に是れ婦女子の最大要務なるべし、古の人が之を以て女德の第一に置き婦人敎育の道に於て之を最も大切なるものとしたるは蓋し其由緣ある也。

然るに當今の女子は其心得べき事柄甚はだ多くして中々に古の婦人の如く淡泊無欲にて暮すべきにあらず先づ理化生理の學術は云ふに及ばず万國の歷史世界の地理の如く遠く且つ廣きもの或ひは天文地質の如く高く若しくは深きものに至る迄で少くとも其の一と通りは學び置かずば相成らず女子の心得べき事柄既でに如此く大に增し加わりたれば當今の女子敎育の方に於ては之に伴つて亦た同樣の進歩なかるべからず今に於て女工裁縫の一科をのみ敎え之を以て女學の大切なる者を盡し得たりと云ふものあらば實に是れ明治時代の愚人たるべし。故に吾人は裁縫の工を以て女德の第一に置き其他万般の藝能を悉く女工の餘事とするが如きは甚はだしく嫌惡して止まざる所ろのものなりとは云へども然れども裁縫を女子の心得べき大切なる仕事の一ケ條と爲し又た此の課業を女學校敎

育の中に必要欠くべからざるの一科目とするに至つてハ恐らく古人に劣らざるの熱心を以て平生主張する所のもの也。

元來衣服を調ふるの一事は大率ね家の細君が擔任すべき筈なれば苟くも荒比亞の人種我國に蕃殖せざる限りは日本國の婦人たるもの常に裁縫の責任を免るゝと能ハざるべし、左らば則ハち凡そ女性たらんものは何人も先づ此の藝の心得を存せざるべからず隨ては普通教育を主義とする惣ての女學校に於ては是非とも此一科を備へ置かずんば相成らず是れ甚ハだ明白至極の道理ならん。然るに吾人當今の女學生なるものを見るに大抵裁縫の事を蔑視して頓と其心得なきが如し女學校の景况を取調ぶるに往々此の科目を疎略にして左程に之に注意せざるが如し眞に驚くべき事にあらずや、古人の誤まりは之を重んずるに失し今人の謬りは之を輕んずるに失す共もに恕るすべきものにあらざる也。

然して女學生の之を蔑視する女學校の之に注意せざる是れ亦た同樣に非難すべきものと雖どもつら〳〵其の弊害の由て起り來る所を察するに其責め多くは女學校教育の宜きを得ざるに歸し教育主任の人其心得なきが故に遂に當今斯の如き惡結果を蔓延するに至れりとは覺えぬ、元來英學佛學等を教授する輓近流行の各女學校に於ては平生能く生徒の氣風の趨く所に注意し兼て其外國語學にのみ流れ易き通弊の在ることを承知し時に臨んで之を矯むるの覺悟なかるべからず蓋し近年洋學の勢力甚ハだ熾んなるに連れて女生徒は大抵只だ此の一邊に競奔し只管らに其の語學の修業にのみ勉强するの弊あり故に和漢學の如く目前に必要なるものをも之を顧みず筆算習字の如く甚だ手近に効能あるものをも之を尊ばず書學音樂の如く偶ま美術の志想を養ひて殊に美妙の味ひあるものをも往々棄てゝ省みず況んや彼の裁縫の如きに至つては殆んど全く之を放棄して毫も念頭に掛けざるとは吾人が屢ば實際に目擊して慨歎する所ろ也、思ふに女子教育の路に當るものは何人と雖ども皆な此の通弊を承知して之が豫防の策に心配せざるものなからん歟然らバ則ハち平生其策を運らして生徒の好尚を誘導するの計を爲し時に或は裁縫の必要を演說し時に或は賞を懸けて其の技を競ハするが如き處置なるべき筈也、然るに數多ある女學校中此等の事に掛念する者實際甚ハだ尠しとの評判を承ハるは實以て痛歎の至と云はざるを得ず斯の如くにして人の子を賊ふは豈に教育家の安んずべき所ろならん哉當路の人深く思ハざる可らず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

蓋し女學校に裁縫科の必要なるは啻に女生徒が之に依つて裁縫の道を習ひ得ると云ふの一事に止まらず其他に一つの最大なる利益の存するに由る也。之を何故と云ふに凡そ男女未だ其異性を發達せずして殆んど陰陽の差別なきが如き少年幼時の頃に於ては所云る小學校の敎育なるものに男女兩科左程の相違なきは勿論の事たり、然れども既に十三四才に達し女質早く發現せんとする所の女生徒を集め之に普通女學を授けて以て陰性相應の敎育を施さんとには當今一般に必要なる諸學藝の外に書學音樂女禮の類ひを敎へて以て女德に大切なる優雅温和の氣風を養成せざるべからず之に續ひては女性に固有する綿密忍耐の氣質を發達せしめんが爲めに亦た之に相應の敎科なかるべからざるの理甚はだ明白ならん因て此の氣質の養成に適當なる敎科の何物ならんかを思慮するときは蓋し何人と雖も裁縫の甚はだ好く之に適當するとを思ひ當るとならん、裁縫は針を運用して衣服を仕立るの藝なり故に其事終始變化なくして殆んど同一の手續を反復するが間だに一沒一現針の出入するところ間斷なく縫ひ手の注意を要す而して最初法に從つて反物を裁ちたる以上は只だ靜座沈默して針を運ぶに在り之を仕上げ了するまで復た新らしき思考を要するとなきが如し綿密と忍耐とに富むものにあらずんば決して堪へ難きの業なるが故に則ち平生此業を稽古する者は依て以て其の綿密と忍耐との氣質を養成するに於て莫大の効能ある所以を知るべし。此を以て女學校に裁縫の科を完うするは第一に女生徒に其必要なる一藝を習ひ得しむるが上に彼の物事に綿密にして万事に忍耐づよき女德最要の美質を發達せしむるの利益あるべきもの也。

然るに悲ひ哉世上幾多の女學校中往々にして此義を守らず敢て重きを裁縫科の上に置かざるが故に左なきだに之を輕んずるの女生徒は彌よ以て之を蔑視し假令ひ裁縫敎師あり裁縫の修業時間ありと雖も成るべく此敎師に遠ざかりて右の時間に欠席し而かも之を責めらるゝときは笑つて以て尋常當然の理由あつて之を怠たるが如きの顏付を爲すに至るとなり。斯の如くして數年の苦學漸く成り某女學校の卒業生として人に嫁せバ才學甚はだ立派にして人の目を眩するに足れども密かに其家政を窺ひ殊に其の簞笥押入等の内面を窺ひ見るときは殆んど憫然の涙を禁ずると能はざるべし、良人の絹羽織少しく綻ろびたり紺の木綿糸を以て辛うじて繕ひ得たる所ろ肩の張上ると共に食み出でゝ其線路を明白にせり、細君の襦袢ゑり

僅かに形を爲して沙汰の如く頸の左右に垂るれども時あつてか按み出されて袈裟の如く下るの辱あり、足袋は破れたるを接がざれば穿き棄てゝ脱いだる足鞋の如く、單衣は弱れりたるに裏打せざれば乍まちにして穴を生ず療されざるの兵卒丸に當つて屍の丘を爲すが如し、偶ま新衣新服を調達せんと欲するときは貧家の會計も不得止常に仕立屋に責任を負はざる可らず然らずんば里家の老母を召び寄せて密かに助力を乞ふの外なく家政上の不取締言語に絶すと云ふべし、而も後に至つて斯の如き不都合に遭ふことを知らず學窓に洋詩を吟ずるの夕べ長歎して世上の婦女子が裁縫の外に餘念なきを憫れみ女丈夫生れて襁褓下帯の調達に半日を消費せざるべからずんば寧ろ人に嫁せざるに如かずと論ずるに至る、故に裁縫の科を見て卑屈女子の甘んじて爲すべき稽古なりと評判し妾は針を運ぶに慣れず他日志成らば如此きは一に仕立屋に委托するのみと大言す女性にして如此き言を發し毫も其の恥とせざるものあるに至ては眞に國家の憂にあらずや、而して如此き女學生が裁縫を蔑視するの氣風は尙ほ延いて其他に及ぼし凡そ綿密忍耐を要する無味不活潑の事業は大抵之を好まず其の弊の至る所ろ遂に女子固有の職掌を放棄して磊落粗放の習慣を喜び陰陽顛倒して國家暴亂の基ひと爲るに至ては實に天下の大患なり。

昔しソマービル夫人と云へるは女性にして有用の學を專修し當時の男子に凌駕して名を後世に轟かせる女學者なり然れども裁縫の女子に適當することを説いて大に之を主張し、ゼヲヂイリヲット女史稗史小説を著はして非常の喝采を博するの傍女子にして家内の仕事を輕ろんずるものを大に卑しみて自から其言を實行し、社會改良の慈善家フライ夫人は女子專一の務めは先家を修るに在り其の餘暇を以て公けの外事に關與するにあらずんば不可なりと戒しめたり。其言一々に當を得たりと云ふにあらず然れども女子が其の家政の擔當に疎畧なるは蓋し何人と雖へども同一に非難して贊成せざる所ろならん而して彼の裁縫の如きは家政取締りの中に於て其の尤も大切なるものなり故に當今の女學生たるものは彼の古人が裁縫に重きを置けるの愚を笑ふに僻して反つて今之に怠るの弊に陷ると勿れ又當今の女學校たる者は能く通弊の趨く所に掛念し誤つて此の切要の教科を疎畧にするの罪に陷る勿れ。

"A woman who has charge of a large household should regard her duties as dignified, important, and difficult." Beecher.

● 論説

○德育よ付ての一案（第五）

加藤弘之述

先つ公立の中學小學（私立は問はず）政府から手の附けられる部分に限つて學校毎よ四の修身科を置たら宜ろしかろう神儒佛耶穌の四之れ丈けか日本にある宗旨であるから之れを置たら宜ろしい此の内よ派かあるが大躰は四である此の四を學校毎に置いて生徒の志す事を敎へ神道なら神道佛なら佛儒なら儒耶穌なら耶穌と父兄の信ずる通りに生徒に説いて聞かせたら宜ろう。そうしたら大變四の修身科を置くよは小學校なぞでは金か掛ッて出來まいといふかもしりませんか私の考には少しも金は入らぬ神儒佛耶穌共よ夫れこそ此の金を遣らなくつても喜こんで敎師となッて敎へる人か出て來るだろう。寺といふ者はどの土地にもあるから佛敎の敎師は差支はない神社もあッて神官も何所よもあるから何所の學校にも困まらずに先生かある儒道はそういふ人はないが今は古るい學者は所々方々にあるから。そう云事になれは喜こんで敎師になる耶穌の方に人は何所にもあると云事には。いかぬけれとも。そういふ事になれは爭ッて先生を何所へでも出す自分から金を出して先生を派遣するに違いないそうすれは其爲めに給料に困る事はなかろうと思ふ夫れから斯う云先生は。どんな人でも宜いといふ事は出來ない品行かよく人望かなければならぬから先生にするには六ッかしい或は隨分人に困るといふ説かあるかもしれません困て人かない儒道の先生が頼み人かないとか佛の先生が足らぬとか云ッて仕方のない所では金を掛ける事か出來ないから其ない所は明けて置いて宜ろしい其生徒は外の信せぬ所の敎科の修身科を聞いても夫れかいやなら外の學校に轉しても宜ろしい。そういふに學校は公立丈けは四の修身科を置いて互に敎しへさせた時は互よ競爭するだろう何んとなれは中學小學の生徒は之れから大人になるんで夫れを學校で自分の味方に入れさへすれは夫れか大人になれは味方に勢力のある者を入れられる道理でありますから。どの敎官も骨を折て自分の宗旨に功能のある樣よ勉强して考へるでありませう實に此の中學小學の生徒から敎しへ込んで自分の宗旨に入れてしまへは一人でも多く入れた宗旨といふものは將來盛になる夫れか出來なければ將來消滅するは當然な事宗旨の存亡興廢は此の競爭で定まッて來るそういふにすれは。どの宗旨の敎派も骨を折て德育の行き届く樣にして好い結果か出て來る道理である夫ばかりでなく生徒の學校に於て能く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

勉強する或ハ怠る或ハ校則に背くといふ事を調へて統計を取つて宗派を分ける年々々々耶蘇教ハ是れ丈け勉強したとか是れ丈け犯則者かあつたとか佛教ハどうとか神道ハどうとか統計を取て世間に公にする公にすれハ宗旨の榮譽耻辱になるから骨を折て教へる夫れから段々好い結果の見える宗旨にハ親か成る丈け其方に子供を入れる成績か見へて來る夫れ故に能く教への屆とく宗旨ハ生徒かふえ夫れの屆かぬ宗旨ハ生徒か減るそういふ事ハ五年七年十年でハ役に立ちますまいがそういふにすれハ段々宜い宗旨が好ひ結果がある悪い宗教が悪い結果がある又夫ればかりでなく生徒か在校して居る時或ハ退校した後刑法に觸れたものかあれハ以前學校に於ての宗旨を取り調らべて統計を作くる之れハ死ぬまて書いて御座いますから一度罪を犯かせば統計を取て比較する此等ハ僅の年數でハ確かに分かりますまいが長い間にハ宗旨に依て好い結果の出る事と悪い結果か出る事と分ると思ふ夫ればかりてない親に孝を盡したとか夫に貞節を盡すとか云つて政府から褒美を貰う其外善行に付て政府から褒美を貰う其人も學校て受けた宗派を調らへて統計を作る二十年も三十年も立てハ宜い宗派にハ好い結果か出て悪い宗派にハ悪い結果か出て來る此の仕方ハ德育に利益かあるのみならず宗教の上にも人間世界に必要な功績を顯す宗教と夫れ程でない宗教と比較か取れる宗教も此の比較に依て存廢を極める宗教の生存の競爭から自然の淘汰か出て來る誠に社會の利益をなす私の德育に付ての考ハ今申した事丈けて此の外にハない之れを委しく云ふと委しくなるか時か掛かるから極くざつといふと今迄申した事丈けて御座います夫れに付て鳥渡御話しゝて置きたいのハ重に神佛の兩派に弊か大變ある樣に思ふ

近頃佛教にハ大變不品行の坊さんがある妻帶といふ事ハ御一新前にハ出來なかつたが政府か妻帶を許した所が大變妻帶か出來た之れハ妻帶しても構はぬといふので妻帶するといふのてハない眞宗ハ。しても構はんが外の宗旨てハ。しても悪いといふ事を道に於て禁じてあるに。そういふに妻帶をするのハ佛教の衰ろへねハならぬ筈だそういふ坊さんハ佛教か衰へても。なんても構ハない唯食つて生けバ宜ろしいといふのてある。けれとも。そういふ坊さんか多い樣な事てハ此の學校の教師に用る樣な坊さんハ思いの外少くないかもしれない寺ハ能く在るか皆無學不品行な坊さんばかりがあるかしれぬ今の學校か出來れハ坊さんが不品行で用ゆる坊さんがなければ佛

敎か亡ひて仕舞ふ自業自得て仕方かない今申した所が仕方かないが。そういふ有樣では仕樣かない又神にも佛にもある開帳をして金儲けをするろうして色々の乞食芝居馬鹿囃等を社寺に於てして其錢儲をするそういふ事は僧侶のすべきものてない。そういふ人は學校の敎員にすへき人てない。そうして見は眞に少ないか知れぬ。そうかと思へは恐ろしい敵か攻入て來て居るにそういふ有樣てあれは一ト破れに破れて仕舞はねばならぬ勢になッて居る斯ういふ敎員に用る術か出來て居れはそういふ次第を回復をする種かありはすまいかと思もふ併し私か斯ういふ事を說に付て駁論者か隨分ある其駁論者は御前は宗敎道德か色々の役ヱ立つ樣にいふか分らぬ夫程役に立かどうか夫程役に立は歐羅巴には惡人か少くなくなければならぬか少くなくもないから宗敎道德はなんにも搆はないといふ說かあるか知れませんか夫れは統計を取ッた事はありませんから宗敎なれば惡人か少くない宗敎てなければ惡人か多いといふ事か。いへないが其駁擊をする人も統計を取たのてなく推察てある私も推察てあれは。どちらも推察に違ない同し推察ならは用心して置か宜しい夫れて役に立たぬ者と極る事か出來ない今外に出る時雨か降りそうな一人りか雨か降りそうなといひ一人りは降らないといふも證據かない其時は用心して傘を持ッて行くか宜ろしい雨の降ッた時雨に濡れぬ利益かある宗敎も同なし事用心して置くか宜ろしいどうも確かな證據かないか確かな方に依るか宜ろしい又もう一ッ反對かある宗敎道德には嘘かあッて人を馬鹿にするから宜ろしくない哲學の眞理から修身を說いて其方から敎へて行かなければならぬといふ說も出るに違いない其說は今迄私の言ッた所て道理か分からうと思ふ迚ても世の中は目明きか澤山居るのてなく盲目ばかりてあるから本尊樣の道德てなければ。いけないといふ事を言ッて。どうも夫れでなければ仕方かない。そうして歐羅巴の樣に宗敎で固めて置ても理學者も哲學者も盛に出て來ろういふ人か宗敎かあッたから出來ないといふ事はない宗敎の內から。そういふ道理を看破して出るのか今の宗敎の有樣てある。そうすれは宗敎の爲に學問を害せらるゝ事はない夫れたから宗敎は人を愚にするといふ說も立たぬ之れて私の申す事は濟みましたどうぞ私は中學小學の修身科は今の樣な有樣ては。いけない斯ういふように。なッたら宜ろうと思ふ併なから私の說ばかりては。いけない諸君の贊成を得て敎育家の說も得て又良い考も出來ませう段々斯いふ說

か教育の輿論となる事を得れハ文部大臣に持出して。そう云譯になる樣に。またいと言ひ出しても宜ろしかろう言ひ出さおいても文部大臣も用ゆる樣になるかもしれないゝ唯夫れ丈けの事てありまず併し初めに申した通り常の學術演說てなく德育ハ今の有樣てハ困るといふ所に考へ付いた丈けた。どうぞ之れては宜いとか惡いとかいふ說の出る樣に望みます常の演說の樣に聞き流してハ困る反對說の出る事を望みます

大變長い演說て大分抜いていひましたから御分りに。ならなかッた所もあろうと思ひますか之れハ版にして出しますから見て下すッて或ハ贊成ても或ハ駁論ても充分されん事を望みます（完）

○金屋の秘决（第四）　　木村熊二

夫れ裝飾ハ社會の情勢に伴ひて變更し時好につれて意趣を異にするものなれど常に其の順序を追て推移るものありそハ單純の美より混合の美に移り漸く進んて繁雜の域に趣かんとするにあり我か國にて二十五六年前の江戶婦人の裝飾ハ甚た單純の美を慕ひたりき夫ハ德川氏奢侈を禁するの嚴なるによるといへとも江戶婦人の賦性活潑にして義俠を重するの習慣ありたれハ其の淡薄の意匠の外貌に顯るゝものと言ざるを得す其の頭の裝飾ハ外形のみを華美にするを屑とせす古渡唐織に甲斐絹の裏を用ひ或ハ下裳にハ大縞の縮緬を被るも外部ハ地味なる糸織を着し之を澁ひ裝飾粹な裝飾と稱してもてはやせり其頃流行せし端歌なとにても風姿を想見する事を得へし試に彼等をして近時の裝飾を見せしめハ野父の頂上として之を擯斥するとあらん是れ全く單純の美の社會に勢力を占し秋なれハなり今や混合の美すらも之を厭ひて漸く繁雜の美に趣かんとする傾きあるハこゝに二ッの理由あるなり第一ハ人の意匠の自然の美より作爲の美を賞翫する事なり明治の初め花柳を弄ふ朝野の紳士ハ多く京坂の華麗と外形の虛色に眩惑せられて東京の單純なる美麗に無限の趣味あるを了解せす繁雜の美ならでハ之を賞讃さゞりき當時外國輸入の什器と衣服を用ゆると大に行れたれハ百事漸く西洋の華美を學んとするの傾きありたり橫濱在住の婦人ハ此の頃已に外國婦人の艶麗を慕ひ年齡三四十に及びたりといへとも紅粉を粧ひ緋縮緬と紫縮緬の花麗なるものを用ひて姿容を裝成するに至りたり當時騷亂の際にして東京の人民難を橫濱に避るもの次第に其の風を倣ふ者多かりきされハ固有の裝飾單純の美ハ全く衰頽して終に其の彷彿を求めんとするも得へからさるに至りたり

第二は技術の進歩によるなり明治三四年の頃より外商の呉服物を輸入するや價の廉にして大に邦人の意趣にかのふ物品を製造して之を輸入せしかは其の摸樣甚華麗にして裝飾に大に便利を感せしめたれは需用も日に多くなりたり若き婦人の帶なとは紫の縮緬呉郎唐てんに遊仙染を用ひ半襟なとにも之を用ゆるにいたりたり其の後桐生西陣の織物も追次に巧者なる物出來れり東京の染物も大に改良を加へて日新の進歩を爲したれは從前より華麗にして價の廉なる物のみ多く從て古し風の地味なる縞は價高くして誰も之を觀るものなきに至りここに於て單純の美を一洗して混合の美に移り終に進んて今日の繁雜の美を愛翫する事とはなりたり奢侈豐盛の社會には單純の美次第に勢力を失ひて繁雜の美其の位地を占んとするとを證するに足ぬべし今や東京は歌吹の海にして綾羅錦繡濃を爭ひ艶を競ふの社會となりたれは婦人裝飾の華麗に失するも止を得さる事なり幸に意匠に富る人幾分か往時の單純に恢復するを得は婦人の姿容は大に高尚なる美麗を添る所あらん余近時若き婦人の巾廣き帶を廢して被布を着るを見るに其の姿は秋の江の芙蓉桃李の艶麗を羨さる風情あり被布は若き婦人にても老婦にても姿に甚高尙なる風趣を添るものなれは婦人には甚適當なる衣裳といふへし夫れ西洋の婦人は杉成の形を愛して腰より上は細きを好とするも我か國にては末廣とて上部の廣かりたるを愛する習慣あり故に腰下は可成丈細く作りて腰より上部は重き帶を結ひ羽織被布なとにて巾廣く作りたり東西の習慣異なる所ありて人の意趣に樣々なれはことゝに美惡を論するも無益の事なれと美術上より之を說けは杉成の姿は自然の美を有するものなるへし被布を着したる姿の美しきは其の裝飾の繁雜ならさるによるなり

先頃團子坂の菊人形品評高きゆへ是を一見せんとてこゝかしこを訪へり人形の衣裳の摸樣餘り作爲と繁雜に失ひたるの憾なきを得す勿論菊人形は團々珍聞の畫に齊しきものにして作者の偶意を想見するまての事なれは意匠の巧拙を評するに足ざれど其の形容の繁雜を去りて四肢と身長の比例宜しきを得たらんには大に美看を呈すへきにこゝに不注意なるか爲に兒戯の如くにして見に足らさる所多かりけり劇場の高尾が兵庫髷に大なる鼈甲の櫛と二十本程の釵を以て飾立衣裳には紅葉の重き縫に金銀の糸を以て之を飾たる外裳を纏ひたる姿と或る商家の娘の裾摸樣の振袖に鼈甲の中さし前髮押へ數莖の金銀釵を用ひて莊飾たる高嶋田は決して美ならさるにはあらさ

れとも餘り繁雜に過ぎて看官の視力を種〻に分ち注意の頻煩しきが爲に美麗の感を撥達する能さるなり寧ろ福助の中條姫が滿頭に銀の花釵を插み紫色か淡紅色の衣裳を着したる姿容又田舍娘の千草染の衣裳をかゝげ頭に一莖の花釵を插みたる容に自然の美の顯るゝは野生の花の鉢植の花より美姿潔秀を備へたるか如く全く繁雜を脫したる處なれはなり中條姫の釵は繁雜ならさるにあらねど玲瓏一色にして視力に煩を與へざれば自ら人をして美麗を感せしむるなり今や束髮の世に行れてより頭裝だけは改良して自然の美を見るにいたりたれど衣裳と粧飾に至りては依然として舊慣を守るは甚た怪むへきとなりこれそも速に改良を加へずんはあるへからす

○家內の衞生　　坪井二郎　述

此度婦人衞生會の御設か在て、私も玆に貴夫人令孃の前で、一言述らるゝと云は、實に私に取て榮譽の事で御座ります。

此婦人衞生會の設立は私も大賛成でありまして、既に私なぞも、此御設のあることを前より望んでをりました。一躰御婦人方は、餘程衞生の事に御注意が無ければなりません、なぜと云ば、御婦人方は、不斷家に御いでになり、一家內の衣食住から、子供衆の養育方迄、皆御婦人方の御役で御座ります。そこで、衣食住や、子供衆の養育方の善惡を知るの學問は、即ち衞生學でありますから、御婦人方は是非此學問を御承知でなければなりません。

此外、婦人衞生會の必要なる所は、凡そ衞生と申しますのは、學問上に議論するよりも、實際に行はなければなりませぬ、御婦人方は前申上た通り、家事を御司どりて御座りますから、此御婦人方が、衞生に御熱心なれば、直にこれを眼前實地に行ふことができ、食物はこれではならぬ、もつと滋養分を益さねばならぬ、亦、衣服はこれではいけぬとか、或は、此家は濕ポツクテいけぬとか、皆之を御改良をなさることができますから、誠に結搆なる事で御座ります。故に、御婦人方は、衞生學の手足であり、亦衞生學の母と云ても、宜く御座りませう。左れば衞生學に於て尊みまする神は、女神でありますが、御婦人方と衞生との關係を明にするは之に越したとはないでありませう、夫故衞生進步の大なる部分は、御婦人方が御引受なさらねばなりませぬから、御婦人方の衞生に取ての御役は、實に重ひ事と考がへます。

そこで、私は今日、玆で何か衞生に關する事を一ケ條御話し致しましやうと、種々考へて見ましたが、餘り能き考へもできませ

んで御座りましたが、遂に今日は、家即ち住家の事に付て述樣と取きめました。私が今ま家の事を御話し致ソート思ますのは、取わけ、御婦人方に取ては、家の事に御注意がなければなるまいと思ひますからで、前にも已に申ます通り、御婦人方は不斷家を御守りにありますから、住家の衛生に適つているかいないかは、第一に御承知がなければなりますまひ、殊に、御婦人方と家と親密ある關係のあると云證據は、御婦人方の唱へ方にいくらも、家に關する語があります、即ち、御簾中樣、奥樣、女房、家內、御家さん、あぞと申すではありませんか。愈此から家の事に就て御話し致さうと思ひます。家の事に就て衛生上注意する事は種々ありまして、不殘之を申上る事はとても出來ませぬが、茲には、唯其極あらましを順序に述樣と思ひます。

● 叢話

○爾曹互に相愛すべし

女學雜誌編者　演述
竹中松三　筆記

西行法師の歌に「枝折せで尚ほ山深く分け入らん憂き事聞かぬ所ありや」と申しまする名吟が在りまするが成程諸行無常の此世の實相を觀じましたらば吾々何人にも斯る思ひが盛んに起るとでありませう、今ま吾々の如きものにても少さか守る所の道に從つて此の活世界を渡り行かんと致しますれば盤根錯節目前に重なり合つて只管らに吾が通行を妨ぐるかと思はるゝ程であります。先づ誤解誤認より惡意性惡もしくは狡猾、そねみ、僞り欺きの如く吾々の心を激せしむるものもあれば不幸、短命、貧苦、疾病、若くは寃罪、落膽、失望、痛苦、の如く吾々の心を痛めしむるものもあつて此世は殆んど人間を苦しむる所ろの刑場であるかの如く思はるゝです。月は皎々と照つて太空に懸り雲を拂つて千古の顏ばせを現はさるゝとき風景眞に得も言はれざる程に立派ではありまするがつら／＼と之を詠むるときは只だかこち顏をして遂に之を歎げく計りの恨に至ることで、又た花は爛熳と咲いて十里一朶の雲の如く棚引き春風其間に薰して自然の美を散じまする時は成程人世にも亦た樂地あるかと迄でに思はれまするが扨て靜かに之に向つて我身の事を顧みますれば今年の花の去年の花にあらざるが如く歲々年々人も吾も死に近づくものであると悟るに至るとで、凡そ此世の中に張り渡したる樂しみの場所には皆な其幕の後ろに悲しみの遠見を現はしまするから人世遂に憂を以て充滿する浮き世の如くに思はれます。夫故之を逃るゝは

先づ此の俗世界を離るゝに在りと考へまして或は山林に跡を隱し或は深山に身を暗ましまするが此の山林深山の內にも尙ほ十分の平和が在りませんから何うか枝折もせで尙ほ山深く分け入りたいと思ひ追々に深く山奧へ逃れても逃れても決して憂を除くことが出來ない遂には此處も亦た浮世の人の訪ひ來れば天行く雲に身を任せてんと迄で述懷して最早白雲に身を乘するより外は致し方ないと思ふ迄に至ることであります。

然し之は世の悲しみを見ることを厭ひ何卒憂き事の無ひ平和を得たいと云つて一意に俗世界を立離るゝ人でありまするが丁度之とは反對に爲つて只だ只管らに世の中の幸福を求め得たいと云つて狂るひ奔走するものがあります。此人々は或は黃金を得んことを望みとし或は名譽地位を高くせんことを望みとし或は卑しむべき肉躰上の慾情を滿足せんことを欲して斯く日夜營々として狂の如く立廻ることであります、然るに始皇帝の如く六國を合從したる曉きには秦朝の長久ならんことを泰山に祈り秦朝やゝ固まつたる夕べには其の命の永からんことを蓬萊島の藥に求むるようなるもので慾は慾の親に爲つて段々と跡に子孫を殘しまするから何の日に至るまでも其望みを滿足することが出來ません。最初は丹羽柴田の如きものと爲れば十分だと思いましたら然し之は羽柴久吉と云つた時の事で最早權力が增長すると信長の莫らんことを欲するに至りませう六十餘州を從へたる頃ほひには更らに韓土大明の領地をも奪ひ取りたいと望むことで此の望を達するまでは矢張り滿足と云ふ樂しみを味ふことが出來ません。夫故最初は此々が在らばさぞかし樂しからう此々の地位と成らば定めし滿足であらうと思ひますが扨て其地位に達して其國を取りまするを其時には此が既でに愉快滿足とは爲りませんで更らに彼方に新たなる物思ひせの希望が立ち現れまする、其有樣を喩へて申さば斯かる人の一生は虹蜃氣樓を望んで一生懸命に走り行く愚者の如きもので嗚呼ア、あの立派なる宮殿樓閣に入りあの美麗なる虹の橋を渡らんにはと躍せく勢を込めて其處に至りまするときは先きに認め置たる景色悉く消え失することでありませう、俗世の樂みを目的として事を爲すものは即ハち此の愚者の所行を學ぶものかと存ずるです。

扨て右二樣の人物は彼此大層に相違して居るようには見へまするが其實の誤まりは殆んど同樣であります、一つは山に入つて樂しみを求めんと致し一つは世の中に沒して幸福を求めんと致し一つは仙人となり一つは俗人と爲りたるまでの事で

吾々の眼より評しまするときは矢張ともに處置を誤まつたるものかと考へらるゝとです。成程吾々も彼の仙人と均しく此世の中の悲しむべきとに心を痛めざるよう致したいと望むものであつて、又た彼の俗人と均しく何か心に樂しみを與ふる所ろの一つの幸福を得たいと欲する者ではありまするが、然し此の憂を去り樂を取らんとするの處置に至つては全く右樣なる無効の方法を採らざるものであります。昔し青き目鏡を掛たるものが万物の青く見ゆるを大層に心配いたした相で色々と工夫をして其の青く見へないように工夫しました即ハち少し暗らい所に行つたらバ青くは見ゆまじと考へて山林に入りました然し矢張り多少青く見へた一層青天尤も日のかゝやぐ所に出でたらば青き色が減ずべしと考へて世の眞中に出でた然し矢張り多少青く見へた之れでは迚も青く見へない樣に致すべき方法が無いとかと歎息して居りましたとの事ですが然し之は愚の至りで尤も手早き治療法は「此の青き目鏡を取り去る」が第一でありませうと申したお話しがある。今ま此の世の中に立つて眞の幸福を得ようとするにも其の方法を外に求めますならバ遂に豁然として光を見るが如き愉快はありますまい、即ハち自分の本心を一つ變化して自分が世の中を見るの思ひを一變するが何よりも手早き方法であらうと考へますが此の本心を變ゆると云ふが即ハち心に愛と云ふ一元素を入れて世の中の万事万物を此の愛に由つて觀察するようにしたらば何如かと云ふの意味であります。(未完)

○和畫講義　(第五)

八木兼辰

學畫者最も其心思を清潔にし其品行を正しうせざるべからず若其人の心濟からず行ひ正しからざれバ假令其畫ハ巧なるとも固より貴ぶに足らざるなり然して畫所の神佛聖賢高士等に對ても亦自から恥ずべきなり古より大に世に貴ぶ所の畫ハ其筆する者忠臣か孝子か義士か高僧か貞女か或ハ卓越の人畫に隱れて世事を事とせずして思操清潔品行方正ならざるハなし(時流に因つて一時名を博するものゝ外)今諸愛姉に向つて一例を擧ん池の大雅の妻玉瀾名ハ町といふ者あり幕府士人某の女なり性敏慧澹泊其孝貞世の知所なり大雅の技倆人敢て知る者なし家甚貧窮自ら扇を畫て賣んと欲す到處買者なし大雅之を湖に投て歸る玉瀾以て意となさず嘗て柳澤淇園に就て畫を學ひ夫妻書畫を作て樂み時ありて大雅三線を彈ずれバ玉瀾琴を皷して和し釜甑塵を生ずるも亦敢て意となさず尋常の婦女をして玆處せしめバ之を何とか言ん偶士人關東より來る

大雅在らざるを以て玉瀾出で接す士人ハ即ち玉瀾の同父異母兄弟にして棠棣の情を盡さんといふ玉瀾亡母の遺言を守り通問を辭す後大雅の名海内に布き玉瀾も亦之に齊うす然れども素樸澹泊貧時に異ならず其畫筆力清逸氣韻尤高し即其氣質の自から筆端に露わるゝなるへし本邦女人の畫を言ふ必す女史を以て先づ指を屈す繪事の衰うるに隨ひ稍や末技に屬し古人の精神を凝し意匠を煉り其蘊奥を極むるもの殆と稀なり近世に至て多くハ席上の戯毫甚しきハ則ち酒場の下物に代ふ誠に嘆息の至りなり椿山翁の如きハ常に袴を着して筆をとる宜なる哉絶て漫然の跡を見ず支那人の語ハ無聲の詩といふ如く其情の筆端に露るれハ初學の時務て沈思して一意規矩を要し輕卒揮拂すべからず然らざれバ手筆を揮ひ心他事を思ひ或ハ惰氣を生し徒らに紙墨を費し而して卒に板刻結の病に陷る（用筆に三病あり一に曰く板板ハ腕よわく筆にぶくして働に力ともしき故に篇板枯燥圓混なる能わす二に曰く刻刻ハ運筆中疑を生し心の欲する如く筆隨ふ能ハす初より意匠にあき事を漫に點鈎して燥裂浮薄ならしむ三に曰く結結もやはり心と手と相戻り滯礙して流暢なる能ハす）之を避るの法ハ沈芥子曰く意筆の先にあり趣き筆を以て傳又曰凡筆を下すハ常に氣を以て主とす氣到ハ則力到る初學の人先沈默靜思（雜慮を退け心專ら繪事を思ふ）簡短なる默稿をなし而して後筆を把を要す」

地球ハ混然たる一塊物にして固より定則なきものゝ如くなれども是を細別する時ハ極て細小の草木蟲類に至るまで自然の規則あり蝶の菜花に戯れ蟬の綠樹に吟じ蟋蟀の堂に鳴き福壽草や水仙の咲き初むるハ四季の規則あり今日の如く種々の機械の開けざる前一丁字を知らぬ農夫星や雲を見て農事を治むる如きハ所謂る物あれバ法りあるなり畫も亦宇宙間の物心に得て筆端に發する混然たる法なく流なき物の如くなれども森羅万象既に筆端に上ぼれバ法則自然に其中に備り其道の開くるに隨ひ法、則ち定る其後或ハ地氣に感じ或ハ風俗人情に隨ひ或ハ稟賦の性に依り宗派と稱するもの創て定る支那にてハ唐の時に南北兩宗分れ日本にてハ巨勢金岡（今を距る大約九百九十六年法を支那に取り一派を開く）春日基光（土佐流の始宗今を距大約八百九十年）狩野正信（狩野流の始宗今を距四百卅四年）圓山應擧（寫生派始宗今を距大約百年）あり是等の宗派を學ふ人自ら學ふ所の派を尊ひ浮世繪（市畫といふ）なとを見ハ甚だいやしむの風あれども其見の狹のみならず畫道に疎きに似たり土佐狩野寫生支那南北各長ずる所あり土佐の宮殿

に於る狩野の人物に於る圓山の花鳥に於る南北兩派の山水四君子に於る如く浮世繪の時世風俗を寫すに長じたれバ是を以て當時の故風を徵し現今の景狀を向來に傳るに缺く可からざる一派なり即ち風俗の寫眞にして寧ろ尊ぶ可くも卑やしむ可からず殊に近來の如き内外人雜居の時に當て衆人群集の畫を後世より徵するに是を以て粉本となし各派の筆意を以て畫く時ハ古の繪卷物の如きも容易になし得べきなり凡何派を問はず其師の長ずる所を知らず先づ其癖を倣ふハ獨り畫のみに非ざれども別て畫ハ形を作るものあるが故に此弊に陷り易し一度陷る時ハ自から善き樣に思いまねびたる先入なるが故に容易に脫し難し菊池容齋翁へ其師の教論に曰く人各稟る所の性同じからず故に筆力自から强弱あり强必ず巧に非ず弱必す拙に非ず好む所ろも亦自から別わればハ余の畫風に意を止めず自からの風を工夫して畫く事に心を用ゆべし後自得する事あるべしと(東洋繪畫叢誌)是即ち古人曰ふ所ろ師學捨短るものあり學者唯己の學ぶ所の畫風のみに拘泥して他の長所を知らざればハ窪花籠鳥の譏を免かれざるべし

"The mother's strong emotions have worked upon her sons; and this may be no inconsiderable cause of the active public progress that is generally made by a nation after a period of trial and suffering."

Shairreff.

●佳傳

○フローラ、マクドナルド(Flora Macdonald)の小傳

緑の山をたどり過ぎ　澗の流をしたひ行き
小路の傍に佇みし　容貌よき小娘フローラハ
袖に置く露目に涙　風を孕める帆影を見れバ
浪のまに〳〵浮び去る　水鳥とや眺むらん
影だにもなき哀れさを　岸うつ波に和しながら
「これが別れか若君に　また逢ふ事の叶ふかや
これが別れか若君に　若く優しき若君に
これが別れよ若君に　又逢ふ事のかのうかや
ベンコンナルの岬に棲む松鷄も　苔燕我家慕ひ行き
クランローナルドの岳に舞ふ大鷲も　我巢彼所と翔り去る
アレ見よ濱の水鳥ハ　葦の渚に接るあり
岩の枕に眠るなり　されど彼の君若君ハ
如何に運命拙なきや　廣き御國を持ちながら
宿る家なし憩む處なし　戰止みて兵散んじ
見る影もなき大空に　靆き殘るうき雲ハ
御國の爲めと我身をバ　悲むしるしと知られけり」

これハこれ詩人ゼームスホッグがフロラの悲歌(Flora Macd

onald's Lament）と題して世に物せしものにてこれよりフロラが名聲は一入高くなりしとかやわれも亦其の實傳を知らまほしと思へは人もまた然らんと書を開きて其跡を尋ぬるにフロラ、マクドナルドと申すはミルトンのマクドナルドの娘にて西暦一千七百二十年蘇蘭のサウス、ウイストに生れ中等巳上の敎育を受けしも素より當時の事なれは僅か普通の敎育に過ぎず完全とは言ひ難たけれど道心を養ひ志操を涵りたればにや其心情と風采はアパレ千載の淑女なれ穉き時父沒しにけるに母は年尙若く紅顏未だ衰へざれば同族なるアルマデルの許に嫁たり去ればフロラも其家に養はれ幾春秋を重ね來てはや花の盛りと香ふ頃彼の一千七百四十五年の騷亂起り來れりこれぞフロラか芳しき名を四方に散せし風となりたれは聊かこれを述へ申さん

これより先き蘇蘭に王統ありスチアルトとなん呼び侍る一朝事ありて王位を褫はれ其國を逭はれ今は流浪の身となる悲さを皇子チャーレスは無念に思ひ王位再興を企てける時にマグドナルドの族殊にクランラナルド家は其議に左袒しけるか獨りアレキサンダー、マクドナルドの一黨のみ頻りに平和の主義を主張し其企の效なきを說きたりフロラが繼父を始め兄ミルトンも平和の主義を持たれど其族の大半は王位再興說の方ゝくなれはフロラも亦其議に從ひぬ

一千七百四十五年八月十五日皇子チャーレスはフランスより船路してスコットランドに着きグレンフヒンニンに上陸しハイランドに在る諸族を糾合しローランドに至り愈尖を加へてエザンボロを攻取り勝に乘じて英都に迫らんと跡を揃へて早やデルビーに着きたるに一戰忽ち破れて漸く殘兵をフエールコルクに集めて進みしに又もやカッロデンの戰に大に敗られ最早再擧に余力なく皇子は辛くも其塲を遁れフランス指して落行ぬコレ其の翌年の四月十六日の事なりきサテ又政府に在りては災の再燃せん事を恐れ皇子が頭に三万ポンドの値を置けりコレ當時ハイランドに於て大族の資產なれば利に迷ひ義に負くの徒を餌さんとて斯くは計りたるなり去れば皇子が身命の危き事薄氷を踏むが如くなれは形を窶つし身を假裝し只管遁る道をば求めたれど一難去れは一難又來り遁るゝ道もあらざれば小舟に乘てサウス、ウイストに着きクランラナルド家に頼りしに昔に變る今日の有樣に皆々淚を催つゝ人遠きコラデル山の谷間なる隱れ家に迎へ入數月の貯を送り與へ倘其間にもフランスへ遁るゝ便を求めたり此事誰云ふとなく遠近に

聞へて早や敵兵數多迫り走れり其時皇子に從ふ者とては只チニール一人のみ外に援兵なし內に寸鐵なし况んや嶮崖絶壁の山路徒歩尚且つ難むに寄せ來る敵は大兵にて而かもこれか長官は兇暴を以て名を得たるキァプチン、スコットと聞く焉でか此の尖鋒を遁るべきこの危急の時に際して顯はれ來たる女裝の豪傑これなんフロラマクドナルドにして今日しも其の兄を訪ひしものなり其父アルマデルは豫て平和の主義を持ちし者の今は朝命に從ひて寄手の一將たればチニールハフロラを見るよりこれ我皇子を托し

參らせべき人なりと思ひ一夜其宿を訪ね短かき談話の濟みし後ち今卿に御紹介致し度一友こそ御坐れと申し出てしにフロラは其心を推せしにや忽ち涙を含み皇子にてや坐はすやと尋ねければチニールも涙を垂れ暫し言葉も無かりし折皇子も其坐に出て來り無念の涙に咽びながらスカイにまて我身を伴ひくれずやと乞はれてフロラは我身の苦難は厭はねどそが爲めアレキサンダーの身に災の及ばんは實にも不愍の至なりと暫し默して居たりしが何うも其所へは行けませぬと答へ

上げしに然れば爾か母の住家に伴ひくれ其所は海邊便も好からんと强て申し出させ玉へバチニールも言葉を續きさすれバ卿には正統の皇子が生命を助け參らせし其榮へと譽れ永く世に傳たわるべしと說き勸め尙其心を得ん爲めゝや婚姻まで申し出でたれど素より利に迷ひ慾に暗むフロラにあらざれハ斷然斷り申さんかと思ひしも皇子の懇願忍ひ難く遂に志を決して御力添へ參らせんと約したり

六月廿七日黃昏時レヅー、クランナルド、フロラ、及び僕マッケッカンハ山を負ひ海に面する皇子が隱家を訪ふに昨宵まで肥馬輕裘三軍を指揮せし皇孫の今日ハ賤が庖厨の裡に羊肉を割く浮沈變遷の世の中とハ云へ余なりと皆々涙を催して晚餐の席に列りしがクランナルド家より急使ありて兵旣に邸に迫ると傳けれハレヅー、クランナルドは直ちに邸さして歸りたり明くれハ廿八日朝色愈よ出立せんと思ひしに素より微行の事なれバ供多きは却りて災を曳くの種あるべしとチニールを招きて其旨を傳へ暇を遣ハせしにチニールハ名殘多くて別れ行んに忍ばねどこれも主人の爲あらバ强て申し出ん樣もあくシブヽヽと落ち行きしに皇子ハ行く影を見送り今ハ心安しとて形付リチンの長上着を着け白洋布の敝膝を垂れ旅頭巾を崇

ふりアイスランド生れの婢にて人に雇はれ行く者に姿を擬し名もベッチ、ブルクと改めたりこれ偏へにフロラが指圖に依ると云ふサテ出立せんとする時皇子ハ非常の備にと短銃一口を懷にせしにフロラはそれは卻りて御身を射の器ともなるべしと諫めたれバ止を得ず只杖一本のみ賴に柱と携へ豫て備へし小舟に乘りスカイに向ひて帆かけしに雜兵原の口喧しく舟に乘りつゝ巡り回るに逢ひたれバ見付られてハ面倒なりと日の暮るまで隱れ伏しビブリースの海峽を過くる頃數多の小軍艦に遭ひたれバ若しや尤を受けなば如何せんと皆々思ひ煩ひたり時に諸人か憂の燒點ある皇子ハ亦衆人の賴む柱の礎あれば皇子ハ何氣なき風躰にて聲朗かに唱歌せハ櫓聲も一入調高し折から風に伴ひ來る絲雨霏々とし衣裳を濕ふせバ余義あく苫の中にと這入しが晝の疲や起りけん鼾の聲の聞ゆのみ東天白み來りて淡霧稍や退くの時水天一髮の間雲か山かと認むハこれスカイの山なりと舟夫ハ勵みて櫓き行く程に島の西岸ウチタ、ニッスに近きたり朝日に映る劍の光波面を傳ふ鯨波の聲此所にも兵の集るよと急に舳を轉へせしに彼等は其れと見るより急に聲上げ頻りに上陸を促し若し命に從ハずバ砲殺せんと威を示したれど豪膽不敵の水夫等ハ遁るべきハ遁れ見んと答

もなさす其全力を小舟の上に注きしかバ舟行矢よりも速なり此の有樣に雜兵原ハ大に怒り無二無三に放發せしかハ丸の下る雨に似たりチヤアレス、フロラは身を潜めて難を避けしか幸にして一人も傷くなく早や數里の海に櫓き出てたりこれより北に向ひて行くこと數里但ある曲浦あり一憩せんと舟寄せしに浦人大に恐れて頻りに歸帆を求めたれハ又もや舟出してキルシュル村に上陸しぬ此所ハウチタニッスを去る十二英里の所に在りてサーアレキサンダアの領地なり

フロラは僕マッケッカンを從へてサーアレキサンダーの家を訪ひしに折から主人ハカムポルランド公爵に從ひてフオルトチーゴストに在り家にハ只其夫人と娘マルガレットのみ留り居たりフロラは案內せられて客間に入れバ其所にハキルキボストのマグナルド夫人を始め副將マクリチト外三四名の面々にて中にも稍年邁け氣格一段高きハキングスボルグのアレキサンダーと申し豫て王政黨の聞へある人なりけれハフロラは一入此の方にハ打ち解け樣々の物語をなす事の序に皇子の事抔申し出でしにキングスボルクは直ちに其席を立ち陰かに使をマルガレットに遣ハし其趣を傳へしにマルガレットは豫てより王政黨の一人なれハ時々皇子と音信もしつれば畧ぼ臨幸ましまさんとハ知りたれど斯くも俄かに現在し玉はんハ意外の事なりと大に驚き直ちに使をドナルド、ロイ、マクドナルドに遣はし如何に取扱ふべきやと尋ねたり時にドナルドは先きのコロデムの戰に破られ瘡口未た全く癒へねども王家の事は默し難く直樣其家に赴き種々談話の末遂にキングスボルグをして皇子を供し奉り無事にポルトリーまで送り奉らしめ自ら其所にて迎へ奉り擁護致さんと約し去りたり

● 寄書

○女學時論の感

錦田女史

左の一篇は編者の知れる某女生が郵寄する所ろ也論旨貫徹せずして多少の遺憾なきにあらずと雖も亦以て當今の女學生が時論に對する感想を示すの一助たらんか則ち遂に茲に掲ぐるに至ると云ふ、編者白

此頃社會ノ狀態一變シ婦女子ノ學術モ日ニ月ニ旺盛ヲ極ムルニ至リシカハ凡ソ女流ト雖モ彼ガ精ヲ勵シテ學ヲ勉メ各自競爭シ今ヤ從來ノ惡習慣ヲ一洗シ其品位モ亦將ニ高尚トナラントス此時ニ當リ世ノ男子ハ眞實ニ吾々ヲ扶助シ全ク泰西流ノ男女相伴フノ風ニナサント思ヒ給フヤ否ヤ妹等ハ固ヨリ今ノ男子ニシテ女子ノ爲ニ幾分カ力ヲ盡サルヽヿアリト思ヒテ之ヲ疑ハサル者ナリト雖モ女子モ早ク亦各自ニ一ノ職業ヲ得テ男子ニ一カラ十迄依賴スルヿナク能ク自營ムノ道ヲ立テ壓制社會ニ居ラヌ樣ニセント草々汲々ソノ業ヲ勵ムニ相違アラサルベシト思フ如何トナレハ東京府內ハ流石御膝下ナレハ人智モ地方ト違ヒ世ニツレテ父兄等モ女子ノ勉學ニ力ヲ盡スト雖モ地方父兄等ハ尚未タ之ヲ宜ロシトセス舊來ノ風ヲ追テ當今ノ時勢ヲ知ラス女子最早十七八才ニナレハ相應ノ所ヘ嫁ツカセントシ更ニ之ニ學藝ヲ敎ユルヿナドハ其尤モ肯ハヌ所ナラン然ルヲ女子ハ自ラ奮發シ父母ニ百日千日ノ願ヲ懸ケ漸ク此東京ヘ出テ相當ノ敎育ヲ得ント思ヒ艱難困苦ヲ厭ハサルニアラズヤ之ヲ見レハ必ス女子ニ確固タル一ツノ目的ノ存スルヿヲ承知シ得ベシト思ヘリ然ルニ此頃或ル男子等ハ當今ノ女子ノ有樣ヲ評シ只唯其好キ良人ヲ探ンカ爲或ハ名聞ヲ得ンガ爲メ一意學術ヲ御化裝道具ニ仕フノミ其實ハ一種ノ流行トシテ觀

ルヘキモノナリナド之ヲ陰ニ罵ルノミカ喋々ト著ルキ雜誌新聞等ヘ記載スルニ至ル實ニ姉妹等同姓ノ爲ニ慨嘆ノ至リト思フ抑モ女子カ其故郷ノ父母ノ膝下ヲ辭メ斷然都ニ出ヅルノ苦心ハ世ノ男子ガ中々察スル所ニアラズ左ルヲ今ノ男子ヨリ斯カヽル耻辱ヲ受ルヿ今迄壓制ノ下ニ苦役サルヽヨリ一層甚シキ耻辱ナリト思ハル如何トナレバ是迄ハ女子ノ擧動ニ付テハ世自ラ一ノ法律ノ如キモノ在テ存シ居タレバ據處ナシ今ハ則チ其レヲ回復シテ正當ノ地位ニ進マントスル折柄此ノ如キ耻辱ヲ受クレハ到底我姉妹ハ自在ノ天ヲ仰ク事ハ難カラン思ニ今我姉妹等ノ地位ハ累卵ノ如ク危シ餘程決心シテ事ヲ採ラネバナラヌ時ナルベシ此明治廿年ノ好機會ヲ失フタラバ又イツカ此ノ快活ナル日月ヲ仰クヿヲ得ベキ我姉妹ノ責任ハ實ニ重シ然レ𪜈今日ノ有様ヲ以テ女子計ヲ責ムルヿ少シク無理ナラント思ハル何故ナレハ此節女學校一般ノ教育ハ寧ロヨキ妻トナリヨキ母トナリ家政ヲ整理シ只女子ノ職掌ハ一家內ノヿヲ圖クナスノミニテ外務ヲ取ルヲ餘リヨカラヌ樣ニ教授スルノ外他事ナキノ景況アリ此ハ元來當然ノヿニメ蓋シ婦人ノ後生ハ斯クナクンハナラヌ所ナラン去リナカラ此事我國當今社會一般ノ必要ニ適中スルカ否ヤ妹等ノ考フル所ニ由レハ既ニ女學進歩メ婦人社會ノ地歩略ボ完備ノ點ニ達シタル歐米文明國ノ如キニ於テハ此ノ如キ教育或ハ眞ニ相應スルヿナラント雖モ之ヲ我國現今女學ノ初歩ニ當テ無理ニ外事ヲ取ラヌ樣ナサントナレバ女子ノ權理ノ果メ能ク擴張スルヲ得ベキヤ一ツニハ學校ニ在ル內結婚ノ契約ヲナサシムルノ一ノ弊起レリ其原因何處ヨリカト云ヘハ男子ノ方之ヲ持チ來スナリ何故ナレハ今大學中學師範學校其外公私學校ノ書生ト云ヘハ多クハ女學校ノ女生ト契約ヲナシ女生ノ學事成就ハ待タザルモノヽ如シ故ニ他ノ女子モ心動キ己ノ教育ノ不完全ナルヲ嘆キナカラモ若シヤ年齢ニ後レタラ天與ノ配偶ヲ得サランカト思ヒ間々其爲ニ苦心セシムルモノナリ縱令女丈夫トナリ社會ニ立テ大事業ヲ働ク婦人ニモセヨ其人ニメ人倫ヲ缺イテ一生ヲ一人ニテ茲ス譯ニハ參ラズ故ニ其苦心ハ實ニ〳〵尤至極ト思ハルヽ所アリ世ノ男子諸君ヨク〳〵目ヲ開イテ今時ノ婦人ノ有様ヲ觀察セヨ今ノ女子妙齡ニ至ルモ社會一般ノ教育上ヨリ見ル時ハ十二三才ノ女子ト見做ス可シ故ニ今學校ニ入リ學ヲ初ムルモノモ多クハ二八ノ阪ヲ超ヘタルノ女子ナリ其人ヲメ少クモ四五年ノ間ハ自由ニ教育ヲ得セシメテバナラヌト思フ左ルヲ此頃女子ノ勉學ノ點ニ付テ世人ヨリ話ス所ヲ聞ケバ其人ニ依リ其說異ナリ今女子ノ心ハ千々ニ碎クルノ時ナレハ自然其引力ノ强キ方ヘ分子ハ集合スル道理ナレバ男子モシ婦人ヲ扶助ケントナレハ徒ラニ誹謗ヲ下サス其宜キ處ニ導クコソ眞情トコソ思フ又一ツニハ女子ガ慨歎ノ念ヲ起シ男子ノ陽如ヲ嗣ント欲スルノ擧動アレハ之ヲ冒頭カラ「ヲテンバ」女ト云フ惡口惜シキヿナリ故ニ今マ能ク社會ノ景況ニ相應シテ純粹ニ女權ヲ擴張セントナレハ如何メ可ナラン實ニウカ〳〵ド過ス可キノ期ニ非ラサルナリ故ニ今ノ女子ハ早ク卒先者トナリ衆姉妹ノ爲メニ世ノ誹謗ヲ顧ミズ男ノ嘲ヲ忍ビ一日モ早ク進ンデ勉學セズンバ非ラザルナリ

〇文苑（ぶんえん）

おろかなる身も心に信じて主の道を求めんとして大阪に來り或夜祈り會よりかへるさの道にて天を仰ぎてたま〳〵感するところを　美濃國　棚田苗子

神のます空をおぼけへ月さねて心の雲も晴わたりけり　在大阪　大橋楊堂

うるはしき空にハ神の在明の月の光りの澄わたりけり

靈幅（たまちはふ）神の道にや入りなんと三河の國より はる〳〵とあしの穂わたの難波津にたどり來て主の教をうくることの有がたさを感謝し奉ります　三河國　大塚ます

きのふ迄神のめぐみの深きをも知らぬ心の淺ましき哉

菊をめづる詞　在大阪　大橋楊堂

大阪なる一致女學校の庭もせに飄尾てふ人のふみよむ子らが朝な夕なのながめ草にもと移し植たるくさ〳〵の菊あり今をさかりと咲出たればうちとのおしへびとたち打つどひて色香にめでゝ思ひ〳〵の考をぞいはれけるが中に菊ハ大同のころ國史に見ねてふる〳〵ハ物に見ねねど唐國よりもて渡りたるものといへばいやとよ本より吾國にありつるものならんとどり〳〵あげつらひするもいかにぞや菊よ菊汝が姿のねんなるがゆゑぞかし などいひて笑ひたれども其こゝろ知らぬ白菊ハよう〳〵しくかたへに黃菊のものいはぬ色と見るさへ面白くいはぬハいふにいやまさる赤き心の赤菊ハおもはゆげなるおもむきありゆかりの色の錢菊のなまめきたるもいとをかしく小菊の花のあまたなるも色香にほこらぬやさしさをめづるさへ哀れと思ひてひが〳〵しき一ことを書ちらしけるこそおろかなれかしこくも神の作り置れたまひしたまものなるに口まめやかに何をいひ侍りぬるぞとて此まなびやにもの學ぶ子らにいたくも咎められたりけり又歌なんかきてわれに與へければうれらをも雜の序にはじかくになん　谷　ふみ子

靈幅（たまちはふ）神の惠の菊の花おろかにならぬ色香とぞ思ふ　山內あさ子

よの中のうきもつらきも白菊のつみ咎もなく咲句ひけり　前川まさ子

まなびやに神の教をきく〳〵の花われも嬉しくながめぬるかな

ある日もみぢを見にまかりたるにいつしかちりはてゝ見る影もなけれハ　福井とめ子

思ひきや霜にくちゆくもみぢばのあとかたもなき影をみんとハ　谷　ふみ子

さりともと思ひしものをはかなくもうつりにけりな峯のもみぢば　楠谷みね子

何事も世に後れたりもみぢばの散にしあとを見るのみにして

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●新報

○勲章奉呈　露國特命全權公使デミトリー、シユウヰチ氏は同國皇后陛下の親書及び勲章を我皇后陛下へ奉呈の爲め公使館書記官アレキシス、デスペイエル氏譯官補ブーホベツキー同ツエンドリーフを隨へ去る十三日午前十一時卅分參內兩陛下へ謁見右畢て同十二時宮中に於て同公使書記官並其夫人へ御陪食仰付られたり又參內の公使及隨員一同へ夫々勲章贈與相成たり當日御陪食の爲め召させられたるは二品彰仁親王殿下同御息所二品貞愛親王殿下同御息所二品能久親王殿下三品威仁親王殿下同御息所榎本遞信大臣土方宮內大臣柳原賞勲局總裁鍋島式部長官同夫人吉井宮內次官同夫人青木外務次官同夫人花房農商務次官同夫人香川皇后宮大夫高倉典侍小池權掌侍北島權掌侍等なりし

又　右勲賞奉呈のことに付て去る十一日の時事新報へ左の如く記載せり

露國皇帝並に皇后兩陛下は遙かに日本皇后陛下の功德偉大なるを賞歎し同國に於て女性に與ふる無上大勲章を贈らんとの事にて東京駐在の露國公使シウイツチ氏を以て近々の內之を奉呈せしむるの都合なるよし日本は無論佛蘭西澳太利の如き國にも未だ女子の勲章とて別に設けあるを聞かず世界各國の例に照らしても多くは男子にのみ勲章を授與して女子の之を受くるもの稀れなり然るに英露の如きへ夙に此設けありて假令女子にても世に功勞あるものは男子と均しく受勲の榮を荷ふ事ありて王族皇妃の國に來遊する時は與に之を贈ることありと聞きしが我皇后陛下に勲章を贈るは蓋し此回を以て嚆矢とす實に本邦未曾有の特例にして露國兩陛下の特に今日を以て此擧ある所以のものは從來東洋諸國の皇后と呼ばれ王妃と稱するものは大概生れて深宮の內に長じ更に下情を察せず又之を意とせず唯親ら尊大に構へて唯我獨尊とのみ思ふ人々ならんと東洋の事情に通ぜざる歐州人は一般に然か想像し居たるに日本皇后陛下は陛下御直轄の學校を建設せられ授產の爲には發蠶場に親臨せられ又織殿を建立せしむる等殖產興業の事を御奬勵遊さるゝと共に大に慈仁の美擧ありて屢慈惠院に臨まれ赤十字社へ行幸遊ざるゝ等實に東洋古今無比の美事にて遙かに之れを聞くも嘉へしく永々親愛の交誼を締めんとの御意にて扨てこそ著無今上の大勲章を奉贈せらるゝものなれと或人は物語れり

○日本音樂會．去る九日午後八時三十分より上野公園內の華族會館に於て催されたる日本音樂會は頗る盛會にて外國人には獨逸公使及夫人を始め英佛獨伊等の紳士何れも夫人同伴にて來會せられ日本人には土方宮內大臣文部の諸官吏各省局の吏員在野の紳士數百人に及べり演奏の曲目は第一部六曲、第二部六曲にて、何れも音樂の妙味を示せるが就中海軍々樂隊諸氏の合奏、東京音樂學校生徒の歐州管絃樂、山勢松韻、山登松齡、山登万和、山田貫松、原如竄等の箏三絃胡弓尺八の合奏等なりき又チーチエー夫人の最高音節獨唱歌は歐州の唱歌に風韻なる人々には餘程の感動ありし樣なり當夜日本人三名にて合奏したる唱歌は鳥尾伏氏の作にて稜威の光と題せり其曲は則ち左の如し

磯。明治の御代也。嗚。光の世也。如何に斯くこそ。輝きぬらめ。」三種の神器。世々に傳はり來て。天壤皆く。稜威の光を。放ちますらむ

又同會は來一月中次會を催す定めなれども今よりは僅々の日數にて準備も整ひ兼ぬる事故三月中まで延會するよし又同會役員は本月限にて任期滿つるに付き近日總集會を開らき改撰をなす筈なりと

○共立女子職業學校　雄子格外の同校は生徒追々に增加し現今二百八十餘名に上ぼり隨つて校舍の狹隘を告ぐるに至りし故明春早く增築の計畫ありと云ふ

○普慈會の慰勞會及寄附　第三回婦人慈善會の委員數十名を去る九日高木海軍々醫總監より芝山の伊勢源樓に招きて慰勞會を開らけり又同會の收入金額七千六百五十九圓十五錢一厘は昨日同會員より東京慈惠院へ寄附せり

○男女交際法の教授　東京麻布東鳥居坂洋英和女學校の校長スペンサー氏は先頃同學校教師ラーシ氏と結婚せしより同氏は女學校に居住して將來女生徒上級のものは英和學校に日々出席なさしめ男生徒と共に理化學を學はしむ殊に感じ男生徒にしてラーシ氏の愛するものを女學校に招きて女生徒の中重立たるものと共に茶菓を喫せしめ種々の遊戲雜談をなさしめ男女の交際まで教授せらるゝ故に後來西洋風の結婚をなすものあらん定めし女生徒の父母は滿足するならんとのなれども編者は恐く之に同意するものにへあらず

○大阪一致女學校　同校は規則追々に整頓し益盛大に進み近頃は校舍の新築に着手し來年四月までには落成の見込なりと又廣告欄內にある如く寄宿生通學生拾名宛を募集せり

○橫濱婦人交際會　は去る十日野毛山の俱樂部にて本年の終會を開らき會員は思ひ〳〵の品物を携帶して福引の餘興を催せしと云ふ

○熊本婦人矯風會　此度東京婦人矯風會の如き主旨にて同會を設立せられ方今會員百二十人許に相成り次第に隆盛に趣く由

○鹿兒島縣下大島の婦人　は頭髮多きを競ひ之れを束ねて銀の眾簪を貫ぬく手甲には一面刺繡を施すを常とす衣は短袖を例とし帶は紫のへコを常とす不潔にして臭氣甚し言語は土言のみにして假語を解するものなく男女共に矮小にして脆弱なり之れ蓋し早婚と食物の不滋養によるなるべし特に小兒にあつては喪家の狗にあらざれど屈伸が縮し亂に似たり其齡十八歲に及ぶも猶內地十二歲の小兒に及ばざるの骨格なり士民は夭死多く四十餘歲を長生と稱する程にして七八十歲の長命を保つものゝ如きは僅に屈指に過ぎざる程なり風俗は質朴敦厚なるが如しと雖も實は寧ろ遲鈍なり土人は七八百人にして皆な懶惰無爲にして職業をなさず食は甘藷を常とし衣は內地嚴冬の節と雖も袷衣を用ゆると稀なり（十二月十四日朝野新聞拔抄）

○美術大學校　今度奈良地方へ美術大學校設立の計畫ある由の風說あり

○結婚法に關する意見　噂に據れば法律取調委員鶴田皓氏は不日發表せらるべき我民法中結婚法に關し此程一の意見案を山田司法大臣へ差出されたる由にて其要

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

旨は近來我邦夫婦間の年齢に不平均のものありて四十歳以上の男子にして二八の妙齢を娶るあり或は三十七八の婦人にして二十一二歳の男子に配するものありて其年齢の懸隔せず實に十年乃至廿ヶ位にて風儀上不都合の廉もあれば結婚法には夫婦間年齢の制限を立て男子は其年齢より何歳相違する婦人を娶るべからざるとし又離縁は法律上許可する事とするも今日の如く理由なくして妄りに離縁するを許さゞる事等なりとか

○洋服裁縫所　沼津宿上ケ土町の仁王某方に寄留する土尾くま子は前年東京にありて洋服裁縫の業を修めし女子なるが此程沼津にて洋服裁縫所を設け成るべく懇ろに教授し且婦人矯風會員なれば同ヶの主旨をも廣めて彼方婦人の風儀を正す見込なりと云ふ

○大津婦人慈善會　同會々員は已に二百五十餘名に及びし由又金品を義捐するもの尠からず同會より第百十五國立銀行貯金預をなしたる金額は五十五圓餘にして薄命者を救助したるは江州膳所の寺田周藏をはじめ其他二三名なりと來る十八日には例の通り大津南町顯証寺に於て第二回の開會あるよし

○女教師死去　東京女子師範學校の卒業生にして久しく丹後國峯山に奉職せる訓導金田千眞女は此程中肺炎症に罹り療養中なりしが去月廿二日終に死去す

●海外女事

○女子と速記　前號にも少か此事を說きたるとなるが彼の万國速記方大會の節にはケンシット嬢は女子と速記と云へる一篇を朗讀し此の業が女子の職業として甚だ宜しきとを呉々も說明ありたる上に尚ほ之が女子の腦力を養成するに付て大なる効能のあるとを論ぜられたり即へち記臆力、認識力、考へ方を精密にすると等は何れも此の速記法に熟練するとに由つて得らるべしと云へれたる由なり

○株賣買婦人　英國にて株の賣買を本職とする婦人は當今たゞ一人あり名をベル嬢と云へり元とブリストル大學にて第一等生の位を得後ちニウンハム大學に入り此處にても亦た評判宜しかりしが嬢元來學文よりも事業に適するとと自ら認め遂に斯る職業に身を委ねられたり初は人々も喫驚したるが其の好都合の景況によりて今は反つて之に服すると云へり

○リバーモア夫人政黨を脱す　米國にて從來共和黨に屬し居られたる同夫人は近來此黨の方向禁酒の主義に對して少しく不快の事ありたるにより此度斷然脱黨せられたれば合衆黨の面々は隱に之を祝し共和黨の人々は之を歎じ禁酒派の會員は一同之を滿足したり而して全國の日々出刊する新聞紙は何れも社說欄内に於て之を批評し中にもスプリングフヒールドのレパブリカン(新聞紙の名)には嗚呼如此く輿論に關係あるの婦人にして而して尚いまだ投票の權を得ずとは尤も奇しむべきなりと云へり

○チカゴの女病院　米國チカゴに婦人小兒病院と云へるあり院内の事務は一切女子の掌どる所なり之は二十二年前博士トムプソン女史が創めて設立したるものにて患者の數常に五十人を容れ外に慈惠施療の部に大抵二百名の貧しき女患者を容れ又た女醫看病夫養成所等をも添ねて支配せりと云ふ

○万國婦人會　現今英國にて伊太利亞の公使と爲れる方の婦人シグノラクリスピ子は其本國の女子教育に熱心し此頃羅馬の都に万國婦人クラブなるものを設け諸國の婦人方を會合せしめて之が交際の便を圖り且つ書籍室演說場等をも用意して有益の教授をも爲さるゝ由なり

○英國に於ける婦人の收入　右標の題目にて取調べたる論文を讀むに其中ち下の如き事柄あり云く先づ英國女王は年に二百十五万弗の收入あり、次にはローブス家の夫人即ち公けの行幸の際常に女王に陪し奉るべき方は年に二千五百弗の俸給あり、次には女王の寢殿に侍るべき宮女は二人にて二週間づゝ相勤るとなるが之は年に銘々一千五百弗を受くべし、次に女王に侍き奉り其の万端の御用を相勤むべき侍女(尤も日に二時間の出勤なり)は年に一千五百弗を受け且つ勤務中もし緣付くとあらば五千弗を賜へるべし、次に女醫中倫敦にて有名なる一人は年に一万弗餘の收入あり、現に新聞事業を執り當年にて既に十五年と爲れる一夫人は今ま年に三千弗の入金あれども最初五年の間は年に二百弗に越る入金はあらざりしとなり、女畫工には未だ多分の入金あるものなし甞にバットレル夫人は十五万弗の利を其繪畫によつて得たりと云へども當今はかゝる例しあらず凡そ畫工は其畫を公會場等に掛け置て名を賣るとなるが現に今ま婦人にして倫敦大學に其揮毫を掛け居るもの二百名あり但し此等の女子は一畫に付て二百弗以上を得るは殆んど難かるべきなり、唱歌の師匠は隨分入金多し現に其弟子を教ゆるには四五年卒業として年に年謝三百弗を拂へざる可からず斯て四五年卒業の后には音樂會にて一夕十弗の禮を受け禮拜堂の獨吟者として二十弗を受る位の熟練は得らるべし但し唱歌者にして流行の會席に登るときは一夕五十弗乃至百弗を得るともあれども之は至て少し、又た音樂師としては入金左程多からず特にハープ及びバイヲレンを彈ずるものはピアノの上手者よりは入金多し之れ畢竟其の仲間の少きゆへならん新聞紙の廣告に一時間二十五錢乃至十二錢にて教授すべしと云へるピアノ彈き手もある也、女教員は近來試験の六かしきに由つて左程に多からず而も其入金亦た少きが如し大なる學校の助手として年に二百弗乃至七百五十弗を受る婦人あり然し此の地位に達するには長年月の勉强と至難なる試驗を經たる上に一日七時間餘授業せさる可らず尤も女學校長の女子の如きは年に一千五百弗を受るも亦た有之なり、郵便局の女書記は一週に三弗より十五弗を受くべし然し之は願人多くして入口少ければ曾て十八才の娘願濟にて名を申出したるのち七年を經て漸く召出ありたるに此時は既に人に嫁して母と爲り最早出勤すると能はざりしと云へり、電信局に勤むる女は一週に二弗半より八弗半を受け又女にして其局長と爲れるものは年に七百五十弗より千二百弗を受くべし、又所々の保險會社にても女子を使雇す彼のプルーデンシヤル保險會社にては在職男子の娘をのみ雇ふとの社則なるが現今二百名の女員あり朝九時より夕六時迄勤務して一週に三弗七十五錢より七弗を得るなり云々

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

特別廣告

東京婦人矯風會錄事（十月以降）

十月八日　午後二時より日本橋教會に於て定期會を開らく

本日大風雨に付一時間延し午後三時より始る

司會　矢島楫

一新禱

一讃美

一記錄報道　佐々城豐壽

一會計報道　本多孝

一勸め　湯淺はつ

一同　竹尾琴

一同　串田茂

一午後五時閉會　來會者廿五名

入會者七名　長井米　伊勢玉　利根りか　大垣利與　平野ふじ　松浦榮　津田利

退會者二名　眞木きつ　松木佐登志

十一月二十三日　厚生館に於て大演說會を開く

午後二時開會四時半閉會

司會　矢島楫

一新禱

一讃美

一演說　酒の害　津田仙

一同　婦人矯風會の隆盛を望む　串田しげ

一同　四海の內皆兄弟　湯淺はつ

一同　婦人矯風會の目的　フルベッキ

一同　婦人矯風會の爲に辨す　佐々城豐壽

一閉會新禱　同

聽衆一千名

同月四日議員集會を佐々城豐壽宅に開く　一時間祈禱會二時より相談會を開く

一婦人矯風會の講修所の建設并集會の方法を議す不決

同月十一日海老名姉の送別會を島田姉の宅に於て開く會集

一同寫眞師日送別會を開き終て會食親睦午後六時散會せり

來會者十一名

矢島楫　服部千代　海老名宮　森島いそ　奏ため　丸岡菊　加藤とし　島田政　奧村操　佐々城豐壽　本多孝

同廿二日　議員集會を島田政氏宅に於て開く

來會者十一名

矢島楫　湯淺はつ　井深せき　小崎千代　潮田ちせ

青木まさ　服部千代　淺井佐久　加藤とし　森島いそ

本多孝　奏ため　奧村操　伊勢とよ　丸岡きく

佐々城豐壽

議決

來る十二月六日紀年會を議す并假講習所佐々城豐壽宅

に定だむ

一明治廿一年一月より會費金五錢以上に定む

寄附

一アメルマン氏　トラックト七百枚

一聖書の友　リフレット四百枚

一湯淺はつ子　婦人論五十部

一津田仙氏　飲酒の誡めの書二百枚

一島田政子　受取證百枚

一福原祐四郎氏　勸告文千部

入會者十二名

是名林　伊勢とよ　笹岡とよ

野澤りよ　庄田りよ　奧村きし

後藤くに　宮部ふじ

鈴木きく　島きん

太田志け　名川八重

（以下次號）

廣告

●基督教新聞

第二百二十九號　明治廿年十二月十四日發行

●目次●基督教新聞○明治廿一年初週祈禱●教報○リバイバル●其他教報●論說○基督降誕日の說●傳記○ウイルバー、フオース傳（第十二回）●雜錄○初代の敎會に於ける婦人の地位○西遊略記（承前）●雜報●廣告

每週發兌一冊金三錢府外郵稅一錢

發行所

東京々橋區日吉町廿番地

基督教新聞

六合雜誌

警醒社

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第十六號發兌

毎月第二土曜日發行

目次○いらつめ●女子は男子よりも貞節ならざるべからず○姫かゞみ●ふくさづゝみ第三回(美妙齋主人)●まわがれつと第二回上●原かね子傳○家政要錄●家政を整理するには熟練を要す●食物の献立○雜錄●ゑよわんだわく(新躰詩)●博雅の三位●服裝の事○講議●經濟學通俗講議(文學士大野爲之)○叢話●バルチイ孃の譚●わどけなき少女○學藝●人間腹中の蟲(醫學士竹中成憲)○批評●中島俊子著善惡之岐細君●辰己小二郎氏著雅語綴字例評○寄書○女學雜誌八十四號を讀て感あり(青葉園主人)○月報

定價一冊八錢半年分前金四十五錢一ヶ年分同八十錢

發行所 東京本鄉湯嶋天神町一丁目五十九番地 成美社

生徒募集廣告

當校生徒欠員に付寄宿通學各拾名を限り入學を許す年齡十二歲以上十七歲以下にして尋常小學科卒業以上の學力を有する入學志願の貴孃は來一月七日迄に申込あれ○洋學科は總て米國婦人數名にて初級より懇切に敎授す○道德學は基督敎主義

大阪府西區土佐堀三丁目六番地

大坂一致女學校

○クリスマス贈物品

蒔繪物○陶器○金物細工○其他

右仕入有之直段の義は極廉價に差上候間多少に係はらず御用向仰付被下度候

東京京橋區銀坐三丁目廿一番地川岸通り

卍 萬家商店

發兌				
十二月○	三日	十日	十七日	廿四日
一月○	七日	十四日	廿一日	廿八日
二月○	四日	十一日	十八日	廿五日
三月○	四日	十一日	十八日	廿五日

定價		
一冊○五錢	郵稅○一錢	(但府內無郵稅)
十冊○四十八錢	郵稅○十錢	(同前)
半年分	一圓十七錢	府外は 一圓四十三錢
一年分	二圓卅四錢	府外は 二圓八十六錢

廣告

一行 一回 前金拾錢 (廿七字詰)
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載するに右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町嚴々堂○東京芝西久保櫻川町萬春堂○東京神田區雉子町關々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新敀町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本鄉區元富士町盛春堂○同本鄉區春木町二丁目解明堂○東京本鄉四丁目文壽堂○橫濱住吉町角田屋貞○京都四條通小橋へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンポード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版舍○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緣町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

發行所 本局 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

持主兼編輯 嚴本善治

印刷 森田豐